

プレスリリース

パリ／東京、2026年4月7日

「24時間小説」— 日本版

文学創作を支援するフランスの団体「L'écriture en mouvement（レクリチュール・アン・ムヴマン）」は、2026年10月22日から25日にかけて第2回「24時間小説」を日本で開催すると発表しました。

アンヌ・フォレスト＝ウィルソンが構想・監修を務める本プロジェクトでは、JR西日本の伝説的な特別列車「TWILIGHT EXPRESS 瑞風」に、8人のフランス人と8人の日本人の計16人の作家が乗り込みます。京都から松江へ、日本の境地を横断しながら、作家たちは24時間で一つの小説を共同で書き上げます。

作家たちが言語の壁を越えて言葉を共有できるよう、まさに架け橋となる翻訳通訳者がフランス語と日本語の間での円滑な原稿のやりとりを図ります。

闇夜を駆け抜けながら原稿が一ページまた一ページと増えていき、軌道上で一つの小説が出来上がっていきます。

「瑞風」の車内でフランス語と日本語で書かれたこの小説は、その後フランス語と日本語に翻訳され、フランスと日本で出版されます。

松江では、「サロン・デュ・リーヴル・エクスプレス」をはじめとする数々のイベントにおいて、作家たちと文学ファンの交流が予定されています。旅は「サロン・デュ・リーヴル・エクスプレス」東京会場が終点となり、東京日仏学院におけるレセプションで締め括られます。

アン・フォレスト・ウィルソン

「夢から生まれたこのプロジェクトはとてもシンプルな内容ですが、日本で実現するのは不可能と思われました。しかし「瑞風」が、松江市が、積極的で才能溢れる著者たちが、魔法のように現れました。10月には、日本の境地を走る列車の中で、24時間で書き上げられる小説が誕生します。」

JR 西日本

「この度の企画内での「TWILIGHT EXPRESS 瑞風」（以下「瑞風」）の特別運行は、「瑞風」が持つ「移動そのものが価値となる上質な時間と空間」を文化・芸術の創造の場として提供するとともに、沿線地域の魅力発信や日仏間の文化交流促進に貢献できると考え、JR西日本グループとして特別に協力するものです。」

松江市長 上定昭仁

「島根県松江市を舞台に、日本で初めての「24時間小説」が実現することを喜んでいますが、文学の交流を通じて、日仏の友好関係がさらに深まり発展することを期待しています。同時に、国宝松江城を中心

とする城下町の風情、松江藩主・松平不昧公が広めた「茶の湯文化」、しじみ・そばに代表される食文化など、世界に誇る「Authentic Japan MATSUE」の魅力が、内外の多くの皆様に届く好機となるものと確信しています。松江市は「24時間小説」を応援してまいります。」

バンジャマン・ランベルグ クレディ・アグリコル **CIB** ジャパン シニア・カントリー・オフィサー

「日本に進出して80年になるクレディ・アグリコル・グループは、主に両国間の貿易や投資プロジェクトへの資金提供を通じて、フランスと日本の絆を強化することに常に尽力してまいりました。「24時間小説-日本版」を通じて、私たちは従来の金融面での役割を超え、豊かで親密な関係にある日仏間の文化交流に積極的に関わる存在となります。」

主なスケジュール

10月22日(木) 京都出発(列車内で24時間の執筆)

10月23日(金) 松江到着

18時(島根県立美術館にてレセプション)

10月24日(土) 松江

(サロン・デュ・リーヴル・エクスプレス、ワークショップ、講演会)

10月25日(日) 東京。東京日仏学院創立75周年

サロン・デュ・リーヴル・エクスプレスにて著者たちと文学ファンの交流

著者紹介

ポール・フルネル (OULIPO)	荻野アンナ
エルヴェ・ル・テリエ (OULIPO)	円城塔
フレデリック・フォルト (OULIPO)	朝吹真理子
エドゥアルド・ベルティ (OULIPO)	松浦寿輝
リシャール・コラス	辻仁成
ジャン＝クリストフ・グランジェ	江國香織
ミュリエル・バルベリー	俵万智
クリストフ・オノ＝ディ＝ビオ	金原ひとみ
俵万智	

ミュリエル・バルベリー

フランスの女流小説家。著書『優雅なハリネズミ』(2006年)の販売部数は1200万部を超え、四十カ国語以上に翻訳されている。

日本で過ごした二年間は彼女の想像力に深い影響を与えた。

小説『京都に咲く一輪の薔薇』や『Une heure de ferveur (情熱の一時間)』(Acte Sud) は、日本に対する思い入れを表している。

2024年に最新作『Thomas Helder (トマス・ヘルダー)』を刊行。

エルヴェ・ル・テリエ — OULIPO

数学者としての学歴を持つ小説家、詩人、劇作家。2019年より OULIPO (潜在的文学工房) 会長。

『異常 (アノマリー)』で2020年度ゴンクール賞を受賞。邦訳は早川書房より出版。

彼の作品は短いものから長編小説まで、ジャンルを問わずアイロニーで貫かれている。

カナダで開催された第1回「24時間小説」にも参加。

ポール・フルネル — OULIPO

小説、詩、戯曲、エッセイ、サイクリングコラムなど、多岐にわたる分野で活躍。

1970年代から OULIPO 会員。

編集者の経歴を持つほか、Société des gens de lettres (フランス文学者協会) 会長、サンフランシスコ・アリアンズ・フランセーズ所長を歴任。

デジタル時代の出版を題材にした小説『La liseuse』は日本語に翻訳された。邦題は『編集者とタブレット』。

制約のなかでこそ本領を発揮する作家。

ジャン＝クリストフ・グランジェ

小説家になる前は、パリ・マッチ、ロイター、ナショナル・ジオグラフィックなどのリポーターとして現場で活動。

ルポルターージュからスリラーまで、世界の暗部や非道さを描く。

著作『クリムゾン・リバー』に見られる鋭敏な文章は世界中で訳され、国境を越えて親しまれている。

フランスと日本を舞台に、目まぐるしい取材に基づく作品を執筆中。

フレデリック・フォルト — OULIPO

詩人。2005年より OULIPO 会員。レモン・クノーの影響を強く受ける。

エレキベーシストの経歴を持ち、ジャズミュージシャンのような気取らない姿勢で定型詩を探求している。

『Le Matricule des Anges』誌でバスター・キートンに譬えられる。

著作は主に P.O.L 社から出版され、『Nous allons perdre deux minutes de lumière (我々は二分の光を失う)』(2021年) などがある。

エドゥアルド・ベルティ

1964年アルゼンチン生まれ。スペイン語とフランス語で執筆する作家。2014年よりOULIPO会員。

超短編小説、長編小説、架空の目録など、あらゆる形式の作品を旺盛な好奇心で探求。

フェミナ賞の最終選考まで残った著作『ウェイクフィールドの妻』は、新潮社より邦訳が刊行される。

著書はアクテ・スユッド、フラマリオン、ラ・コントラレなどから出版されている。

クリストフ・オノディビオ

1975年ル・アーヴル生まれ。現代文学アグレジェ（高等教員資格保持者）。ジャーナリスト。ル・ポワン誌編集次長。

2013年に出版された著作『Plonger（潜る）』では、海、欲望、喪失が織りなす、陽光のような文体が鮮烈な印象を残した。

以来、愛、戦争、流浪人などを繰り返し描く作品を著す。彼にとって、軽さは正確さの一つの形である。

リシャール・コラス

ラングゾー（フランス国立東洋言語文化研究所）およびハーバード・ビジネス・スクールで学位を取った後、1979年に来日し、以来、日本で暮らし続けている。

シャネルなどで過ごした四十年にわたる波乱に満ちたビジネスマン人生と並行して、フランス語および日本語で文学作品を発表している。

著書『Dictionnaire amoureux du Japon（日本を愛する人の辞典）』（Editions du Seuil）は、ある国をこれほどまでに深く愛するというこの意味を、いかなるエッセイよりも雄弁に物語っている。

彼にとって日本は、その全作品に貫かれている内なる言語なのだ。

荻野アンナ

日本人の母とフランス系アメリカ人の父の間に生まれる。慶應義塾大学、ソルボンヌ大学で学ぶ。

彼女ならではの軽やかさで、日本語とフランス語の間にユーモアを通わせる。

芥川賞（1991年）、読売文学賞（2001年）、伊藤清賞（2008年）を受賞。

パロディとアイロニーが交錯する文体によって、作家、語り手、文章の境界が曖昧になる。

円城塔

物理学者の学歴も持つ。2007年から執筆活動に専念し、構造を揺るがし続けている。

2012年に芥川賞および日本SF大賞特別賞を受賞。

2025年には『コード・ブツダ』で読売文学賞を受賞。

SF、言語、理論が織りなす、心地よい眩暈を誘う作風。

朝吹真理子

静謐、即ち他者が空白として残す空間を埋めるようにして筆を進める。

慶應義塾大学で日本文学を専攻。

2010年に文芸ドゥ・マゴ賞、2011年には『キコトワ』で芥川賞を受賞。

記憶の微細な揺らぎを重視した作風。

松浦寿輝

ボードレール研究の専門家。東京大学およびソルボンヌ大学で学ぶ。小説家になる前は詩人だった。

芥川賞（2000年）、読売文学賞（2004年）、谷崎潤一郎賞（2017年）を受賞。

東京大学名誉教授。文学、映画、建築に関するエッセイスト。

欲望、記憶、知覚が厳密さと官能と相俟って、常に感覚の縁に立っているような作品を書く。

金原ひとみ

二十歳の頃すでに、何であれ取り繕おうという気は少しもなかった。

処女作『ヘビにピアス』は、身体、痛み、そしてアイデンティティを、実直に描き出している。

すばる賞（2003年）、芥川賞（2004年）、谷崎潤一郎賞（2021年）を受賞。

二十年以上にわたり、決して読者に迎合しない、妥協しない作品を書き続けてきた——だからこそ、彼女の作品が読まれているのかもしれない。

辻仁成

現代日本文学を代表する小説家であり、四十年近くにわたり、孤独、愛、記憶、そして離郷を主題とした作品を書き続けている。

すばる賞（1989年）、芥川賞（1997年）を受賞。『白仏』は1999年にフェミナ外国文学賞を受賞。

多くの国で翻訳、出版され、その作品は国際的に幅広い読者に支持されている。

ノルマンディーに居住し、日本とフランスの文学的対話における貴重な存在。

江國香織

1964年東京生まれ。父は詩人の江國滋。言葉が世間を生きる方法の一つである家庭で育つ。

1991年に出版された『きらきらひかる』で、同世代の声を代表する作家の一人としての地位を確立する。

以降、人間関係、喪失、現代的な孤独の形について、繊細さと独特の軽やかさで探求。

人々が観察するように文章を書く。見過ごされがちな事柄に対する配慮と細密な注意をもって。

俵万智

1962年大阪生まれ。早稲田大学で日本文学を学んだのち、神奈川県の高校で教鞭を執る。

1987年出版の『サラダ記念日』は「サラダ現象」を引き起こした。

280万部を売り上げ、あの世代に、歌が自分たちのことを語っているという気づきをもたらした。
短歌という、千年以上もの歴史を持つ文学形式の中に、ありのままの生活を落とし込む。
日常を短歌で詠むことによって、世間に波紋を投げかけ。

お問い合わせ先

ディレクター：アンヌ・フォレスト＝ウィルソン

anne@ecriture-en-mouvement.org

+81 80 7931 8899

メディア担当：フローラン・ダバディ

new.office.fd@me.com

+81 70 4206 1583

パートナーシップ担当：スイモン・タルヴァール

simon.talvard@gmail.com

+81 80 5701 7669